梶井喜内は商談を終え、無事取引相手と相成った会社のビルから二十分ほど歩き離れた場所でやっとネクタイを緩めた。そして派手ではないが品のある時計も外し、鞄に入れた。

「ふうぅーーー……」

久しぶりに息をしたような気すらした彼は、目指し歩いていた公園に入り、ベンチに腰を落ち着けた。鞄から飲みかけの麦茶を取り出し、飲む。

「……」

突き刺すような緊張感に触れ続け、張り切ったままの精神をゆるませるには、それではとても充分でなかった。明らかに、彼の脳は強烈な糖分とそれに釣り合うだけの苦味を欲していた。

それは要するにつまり、足を運ぶ機会をずっとうかがっていた喫茶店についに入る機会を得たのと同義だった。

「よし、歩くか」

喜内は手で足に鞭を打ち、はっきりと記憶している喫茶店の方へと向かい始めた。

戻った大通りをしばらく歩き、幹線道路下を流れる川を下り、眠るホームレスの脇を通り過ぎ、やがて赤塔が見えてくると川沿いから町中に戻った。巨大な蟻の巣のようにめぐらされた小路であるにもかかわらず一切足を止めずに歩く。ちなみにそこは下町と呼ばれる場所だった。

下町の一角に、ひっそりと店はあった。いくらか蔦に覆われていて、入り口は一メートルほど赤レンガの階段を下りたところにあった。店は半地下にあるようだった。

それらの特徴は記憶のものとぴったりと一致した。喜内は終始変わらなかった顔を、明らかに破顔させた。秘密基地に適した場所を見つけた子供のようだった。

よく磨かれたクロコダイルの革靴が階段を下る。扉はやけな重さがあったが、スーツを下から圧迫する筋肉を手こずらせるほどではなかった。

「……おお」

漏れた声は感嘆だった。

極力電灯が排された店内だったが、大きな窓から差し込む光が店内をほどよい暗さにしていた。カウンター内の壁には大きな絵が飾られていた。そしてその前には正に絵から飛び出てきたかのような老爺が新聞を広げる姿があった。

「いらっしゃい」

まだ休憩の時間中に入ってきた客への老爺の声はおだやかでやさしかった。

そんなことも露知らず、喜色を顔ににじませたまま、喜内は訊ねた。

「ホイップアンドストロベリーパンケーキってありますか」

「ああ、あるよ。食べるかね？」

「それとオリジナルブレンドコーヒーを」

二時間前までは目の前の相手に対して適した感情と言葉を振りまくだけだった男は、これから提供されるはずのパンケーキを想うだけで溢れるよだれを止められなかった。